

洛友會報

京都大学工学部電気系教室内
洛友會
京都市左京区田中大塚町49
075-701-3164

品質管理から見た日本

横河ヒューレットパッカート株式会社社長

洛友会東京支部長 笹岡健三

私が昭和26年に大学を卒業し、横河電機の若いエンジニアとして働いていた頃の日本の製品は「安かろう、悪かろう」と言われた時代で、日本製の真空管やロータリスイッチは直ぐにだめになり、品質の高い欧米の部品を入手すると貴重品のよう扱っていたのを覚えていてます。ダイオードやトランジスタの時代になっても、日本製は直ぐにパンクしたり、足がゆるんだりしたものです。

それから約20年後、昭和47年（一九七二年）私はアメリカとの合併会社横河ヒューレットパッカートに移りました。ある時HP社の友人が「娘の卒業祝いに日本車を買

つたら、納品初期のトラブルが全くないのに驚いた」とほめてくれました。私は彼女の幸運が続くとを祈ると共に、初めて日本製品をアメリカでほめられたことに面映ゆく感じました。

ところが一九八〇年HP社のアンダーソン氏がワシントンの講演会で「当社の実績によれば、日本製のICメモリ（16KDRAM）の信頼性はアメリカ製よりも10倍高い」というセンセーショナルなデータを公表しました。この発表の衝撃は強烈で「アンダーソン爆弾」と呼ばれ、ハイテク分野におけるアメリカの品質に対し、アメリカ人自身による初めての公然たる警

告となりました。実はそれよりずっと以前に、二人のアメリカ人が日本製品の品質について、驚くべき予言をしています。敗戦の焦土がつづく一九五〇年に日本に統計的品質管理を伝えたデミング博士は、その教えを忠実に実践した当時の日本の経営者や従業員の間を見て、日本製品の品質は数年を出ずして欧米を超越するだろうと予言しました。当時としては恐らく世界で唯一人の先見の明であったと思います。

また数年おくれれて来日したジュラン博士は、品質管理を技術面から経営面にまで広げ、今日の経済大国日本の建設に大きな貢献をした「全社的品質管理TQC」の源流を開いた人ですが、欧米製品と日本製品は一九七〇年代半ばに品質が逆転し、欧米の産業は日本から深刻な挑戦を受けるだろうと警告しています。

まさに一九七五年は戦後長く続いた日本の対米赤字から、貿易収支が逆転した年となり、それはジュラン博士が指摘した日米品質逆転の時期とも一致します。

当社の社員が誇りに思っていたHP製品の品質に危惧を抱き、いっそのこと日本から学ぼうとして私共がTQCに出会ったのも丁度その頃です。数年にわたり指導を

受け、実践に情熱を傾け、遂に品質日本の頂点を象徴する「デミング賞」を受賞したのは一九八二年のことでした。

この頃にはアメリカの消費者に MADE IN JAPAN は高品質であるというイメージが浸透してきました。また心ある企業は日本のTQCを学び始めました。HP社もヤング社長のリーダーシップの下に、世界中でTQCを導入し、八〇年代に全製品の故障率を10分の1に下げる快挙を成し遂げました。

アメリカは産・学・官協力して「マルコム・ボルドリッジ国家品質賞」を制定し、アメリカの品質地位の挽回のために、多くの企業が努力をしています。

私もボーイング社等の企業や大学、協会などに「QC行脚」を頼まれたり、日本品質管理学会長として国際協力に微力を注いでいます。こうした中で私は最近、果して日本は本当に「品質先進国」なのか、という疑問を抱くようになってきました。

敗戦という困難を切り抜けるのに、品質管理は大きな貢献をし、日本製品の競争力は高まり、経済大国日本が出現しました。しかしよく見れば、競争力が強いのは自動車・鉄鋼・電機など一部の製造

業に限られ、農業、金融、流通など社会全般を見れば、日本は明治以来の発想から抜け切れず、多くの規制の中で肩をよせ合い、結果として開放された市場にはなっていない。

日本人が自慢している品質管理の根本思想は「消費者優先」であるはずですが、日本の社会は消費者よりは業者が、市民よりは行政、そして国益よりは既得権益が優先している列が余りにも多い。

また「他責をあげつらうよりも自責を省みよ」がQCの改善活動の原点ですが、自国に山積する問題を放置して、他国の労働者の質を云々し、相変わらずの汚職と審議中断を繰返す日本の政治の品質と生産性は、他国を批判するどころではないと思います。

一部の工業製品で、あれ程の高品質を実現し、外国の尊敬と経済大国の地位を獲得した日本が、その誇るべき品質管理の思想から見て恥しい程「品質後進国」の姿を各方面にさらしていることは、品質管理の恩恵を説いている者として残念でなりません。

先人の遺した品質管理の偉業をふりかえるにつけ、敗戦以来第二の困難に直面している今日の日本において、品質管理は今度は何ができるのかと考えさせられる此の頃です。

平成四年度洛友会総会通知

一、年月日 平成4年6月27日(土)

一、場所 ホテル京阪京都

(JR京都駅八条口前アバンティ東側)

TEL 075-661-0321

一、行事受 付 15:30

関西支部総会 16:00

本部総会 16:40

懇親会 17:25

一、会費会員 四、〇〇〇円

同伴者 二、〇〇〇円

ただし平成4年3月卒業生は無料

会費は当日受付にてお支払いください。

なお、これで総会出席通知に代えますので、ご出席の方は6月10日までにご連絡をお願いします。

本会へはご家族同伴を歓迎しますので、多数お誘い合せの上ご出席ください。

定年退官に際して

若林 二郎



私こと、今年3月末で定年退官致します。昭和26年9月に工学部助手に採用されて以来、40年を越える期間京都大学に勤務しました。最初林重憲先生の助手として、インバータ回路の研究と、先任の川口先生から引き継いだ静電分離の研究に取り組み、結果的にはインバータ回路の研究で学位をいただき、静電分離の研究は実用化に成功しました。

その後研究テーマを原子力分野に転換し、昭和33年に工学研究所(現原子エネルギー研究所)に移ってからは、インバータ回路や静電分離の研究を縮小させながら、原子力分野の研究に焦点を絞りこん

できました。まず原子炉の出力脱走動特性の研究からスタートし、その後動力炉の空間依存動特性、原子力プラントの異常診断、事故発生プラントの診断と実時間事故追跡シミュレーション、マンマシンシステム(MMS)へと、研究分野を広げてきました。

その間、当時助教の星野先生(現筑波大学教授)は、研究の過程で並列計算機に興味に移り、第5世代の計算機として世界から注目される研究をなさり、また現助教の吉川先生は、MMSを人間側から注目し、人間の認知科学とそれに基づいたインタフェースの研究を進め、世界から注目されています。一方研究の過程で必要になる計算機シミュレーションやA

若林二郎教授(昭和二十六年卒 原子エネルギー研究所) 退官記念講演・記念パーティのご案内

一、退官記念講演

題目 「四十年を顧みて」

日時 平成四年六月二十七日(土)午後四時より

場所 新・都ホテル

〒六〇一 京都市南区京都市八条口前

TEL (〇七五) 六六一七一一

二、記念パーティ

日時 平成四年六月二十七日(土)午後六時より

場所 新・都ホテル

(問い合わせ先)

〒六一一 京都府宇治市五ヶ庄

京都大学原子エネルギー研究所

若林二郎先生退官記念会幹事代表

吉川 榮和
大西 正視
五福 明夫

TEL (〇七五) 三三一三一一 内線 三四一・三三三〇・三三四二
FAX (〇七五) 三三一三三四 (原子エネルギー研究所事務室)
(〇七五) 三三一三四〇七 (研究室)

I応用の分野でも、研究室では多くの成果を挙げつつあります。
 顧みますと、林重憲先生、近藤文治先生、西原宏先生など、優れた指導者に研究者として育てられ、また優秀な研究スタッフや学生諸君に恵まれて研究を伸ばすことが出来ましたことは、私にとつて大変幸せでした。

なお、4月から舞鶴工業高専の校長に就任することになり、中堅

停年退官を迎えて



今年3月、私は停年で京都大学を退官します。いろいろ研究の日々を思いだし考え無量です。私が京都大学理学部地球物理学科を卒業し、旧制大学院で長谷川万吉教授の指導を受け、電離層の研究に

技術者の育成に微力をそそぐとともに、原子力システム工学の発展にも尽くしたいと考えています。今後とも洛友会会員の皆様の御交誼と御支援をお願い致します。

平成4年3月31日原子力エネルギー研究所(原子炉計測工学)教授を定年退官、4月2日より舞鶴工業高専校長に就任予定。
 (昭和26年電気工学科卒)

加藤 進

従事していた頃、電子工学教室の前田憲一教授が電離層観測を計画し装置を開発しておられました。時折、長谷川先生を訪ねて来られていた前田先生は装置開発を手伝う人が居ないか長谷川先生に問われたそうです。以前より、電離層の研究会で高名な前田先生を知っていたので、この話が伝えられたとき、私は少し考えた後、受ける決心をしました。昭和30年の秋でした。以来、37年間、電気系教室関係者として暮らし、洛友会の御世話になりました。昭和36年までは電子工学教室、以後、工学学部付属電離層研究施設、そして昭和

56年、工学部から同研究施設が独立して現在の京都大学超高層電波研究センターになってからは同センターに、それぞれ所属しました。電離層研究施設で昭和42年、大林辰蔵氏の後任として2代目の超高層物理学部門の教授に任命されました。現在、本センターで教授兼センター長を務めています。

理学部で私が始めた超高層大気物理学の研究は、前田憲一先生の創られた歴史と環境で大きく育ちました。超高層から中層大気への興味の方がりと私を取り巻く工学的雰囲気、そして時代の要請は流星レーダーの建設、さらにMURER

この発展は電離層研究施設の歴史にとつても誠に自然でした。宇宙研はロケット、人口衛星で地球の外遠く行き、太陽風に曝される地球を見ようとしました。極地研は同じ目的で地球磁場の窓である南極で超高層の観測を試みました。同好の者と共同で、私はレーダーで内側の大気を見ることにしました。私達の目指す所は、地上から文明の発展と共に外に向かって拡大していく生活圏、その地球環境を支配する大気のダイナミックな全容を知ることです。振り返ると志しを同じゅうする優れた人材に恵まれ、彼らを原動力にして、私はこの「研究極道」を走ったと言

えます。大変楽しく変化に富んだ日々でした。洛友会の御発展を祈念致します。

加藤 進教授 退官記念講演・記念パーティのご案内

一、退官記念講演(超高層電波研究センター主催)

日時 平成四年五月二十三日(土)午後二時より
 場所 京都国際ホテル 於2F「二条」の間
 〒六〇四 京都市中京区堀川通二条城前
 TEL(〇七五) 二二二一〇一

二、記念パーティ(退官記念会主催)

日時 平成四年五月二十三日(土)午後五時より
 場所 京都国際ホテル 於2F「平安」の間

(問い合わせ先)

〒六一一 宇治市五ヶ庄
 京都大学超高層電波研究センター
 加藤 進先生退官記念会幹事代表 松本 紘
 TEL(〇七七四)三三三三三三 内線三三三三
 FAX(〇七七四)三二一八四六三

教官の異動

次のような異動がありました。

小野寺秀俊

平成4年1月1日、電子工学教室講師より同、半導体工学講座助教授に昇任。

(昭和53年電子工学科卒)

野田 進

平成4年3月16日、電気工学教室講師より同、電気応用工学講座助教授に昇任。

(昭和57年電気工学科卒)

吉田 進

平成4年3月16日、電子工学教室助教授より同、電子回路工学講座教授に昇任。

(昭和46年電子工学科卒)

マイクロ波駆動電気飛行機

MILAX計画

松本 紘 (昭40卒)

超高層電波研究センター長
(宇宙科学研究所客員教授)

現在、20 kmの高高度を半永久的に飛行しつづける航空機を利用した成層圏プラットフォームが郵便省を中心に検討されはじめています。これが実現すれば、通信、環境モニタ、交通管制などに画期的なシステムを構築できる可能性が高いからである。

このような半永久旋回航行するプラットフォームの実現方法の一つにマイクロ波駆動飛行機が考えられる。航空機は通常自身自身で燃料を持ち上がり、それをエンジンで消費しながら航行するため長時間にわたって飛行を続けることはできない。地上から飛行機に向けて送られるマイクロ波エネルギーを受電し、直流に変換し電気モーターを回せば飛行機は半永久的に飛ぶことができる。カナダでは既にSHARPと呼ばれる模型飛行機で実験が行われた。

エネルギー伝送を実験的にデモンストレーションするために、模型飛行機を用いたMILAXと呼ばれる小さなスケールのフィールド実験を計画した。MILAXは、Microwave Lifted Airplane Experimentの頭文字をとったものである。MILAXで用いられる模型飛行機はクライターの様な形をしている。その胴体部の下面および主翼の下面には「レクタナ」と呼ばれるマイクロ波エネルギーの受電素子を張りつけ、それによってマイクロ波エネルギーを直流に変換して電気モーターを回す。マイクロ波送電器はカナダの場合に用いられたパラボラアンテナによる機械式追尾システムでなく、電子式に追尾可能な一〇〇個のサブ・アレイからなるフェイズド・アレイ・アンテナが用いられる。この送電器によって約一、〇〇〇ワットのマイクロ波エネルギーをビーム状に送

出できる。このビームは飛行機の位置を検出するコンピュータと連動して、自動的に飛行機の方向に向けられる。

本実験の目的は、単に成層圏プラットフォームのためのマイクロ波駆動飛行機の試験だけではない。マイクロ波エネルギー送電の技術は、有線送電が使えない宇宙空間での電力送電に必要不可欠な技術である。宇宙空間で太陽光を利用して発電し、それをマイクロ波に変換して地球に向けて送電するという宇宙太陽発電所がその例である。宇宙ではその他、発電専用の衛星を打ち上げ、電力をマイクロ波で他の衛星や宇宙基地に送電するのにもマイクロ波送電技術が用いられる。MILAXはこのよう

な未来のマイクロ波送電技術の確立を目指した実験と位置づけられている。

MILAXの研究者グループはそれぞれのシステムを分担して行われる。本実験で用いられるマイクロ波送電器は、国際宇宙年の事業の一部として一九九三年一月に行われる予定の宇宙科学研究所のロケット実験ISY・METSに用いられるマイクロ波送電器を利用することになっている。ロケット実験で宇宙実験に使用される前に、ISY・METSのテストを兼ねて、MILAXで有効利用さ

れるわけである。従って、本実験には宇宙科学研究所の客員助教授で神戸大学工学部の賀谷信幸教授と郵政省、通信総合研究所の藤田正晴氏らが参加する。両氏とも電気教室の出身者である。そのほか航空技術研究所から模型飛行機の設計に関する事で相談に乗ってもらったり、民間会社の協力も得ることになっている。

MILAXで用いられる模型飛行機はおよそ15 mの高さを約10 mの旋回半径で飛行する。飛行機の位置検出にはテレビカメラを用いた三点測量で行われる。実験の実施は一九九二年の京都大学超高層電波研究センター信楽観測所内の敷地で行われる予定である。

支部だより

九州支部だより

とき 時

増岡 健一 (昭21卒)

毎週のロータリーの例会出席に際して思うのは、月日が過ぎるのが早いということである。少年の頃は、夏休みや正月が心から待ち遠しかった。あと何日かと指折り

数えたものである。「もういくつ寝るとお正月……」という唱歌は子供心を実にうまく歌っている。いつしか、こういう感性も薄れて大人になっていた。

技術的内容は左記のとおりである。

送電器	アンテナ	素子数	送電電力	周波数	受電器	アンテナ	全長	主翼幅	重量	飛行高度
	円形パッチ・フェイズド・アレイ・アンテナ	300素子(100サブ・アレイ)	1.3 kW (13ワット/サブ・アレイ)	2.41 GHz (CW)		円形パッチ・アンテナ	1.63メートル	2.5メートル	2.7 kg	10メートル
						ナ/ダイポール・アンテナ				
						レクタナ	120素子(20素子x6)			
						飛行機語元				

「月日は百代の过客にして、行きかう年もまた旅人なり。」とは、奥の細道の冒頭の文名である。時間を旅人に例えている。その旅人が時に飛行機に乗り込み、時に足を止めて休息をとる。その結果時間の過ぎる速さが違ってくる。そう考えると面白い。

時間は、時計の上と私達の意識の中では進み方が大きく違う。同じ一日でも、夢中で我を忘れて何かに没頭した一日と、何もせずに退屈に過ごした一日では、大きな差がある。それかあらぬか永い会社勤務を卒業して4年ほどもたつというのに、骨の髄までしみこんだ「生産性向上心」は未だすこぶる健在のようで、稼ぎになる仕事は何も持たず余暇ばかりという境涯にもかかわらず、この精神はその時間の生産性向上に立ち向かい、その結果数々のイベントに追いまくられて「余暇がなくなる」という状態にたち至っている。所謂悠々自適ならぬ汲々自適とでもいったらよいだろうか。

時間は不可逆であるから恐ろしい。それを痛いほど感じるのが死の瞬間であろう。自分は何をしてきたのだろうかと後悔してももう遅い。だが時計の上での時間は不可逆であるが、意識の中でのそれは可逆となり得る。現在、過去、未来と時空を超えて戯れることがで

きる。過去を振り返って反省して未来に役立て得るものも人間である。

さてこのように考えてくると、自分の今までの40数年に及ぶ会社人間のときと、現在とはどうなのかなどというところに落ちつく。簡明直截に言えば、時間の使い方やその中味などでも大枠が与えられ、あるいは他との関係でその部分が強制されている場合に比べて、殆んど自分で決められるような大きな自由度を持っている場合の方が

その選択の結果により大きな自己責任を持たなくてはならない。これから先の時計の上での時間は確かに短いであろうが、人生をたっぷりと生きたという感懐を持てるようにしたいものである。人生の先輩にお聞きしたいこの頃である。



第56回関西洛友会

ゴルフ競技会報告

大田垣 文雄 (昭53卒)

第56回関西支部ゴルフ競技会は、平成3年12月22日(日)武庫之台ゴルフ場にて開催された。

参加者は、西村正太郎先生(昭16卒)、上之園親佐先生(昭18卒)、事務局の矢木原邦雄氏など37名で、組合せは、卒業年次の離れた会員間の交流を図っていたため、卒業年次を離れた組合せにし、10組、アウト、インでスターとした。

結果は、

優勝 黒田重信氏(昭41年卒)

2位 亀山卓郎氏(昭42年卒)

3位 吹沢直温氏(昭30年卒)

で、黒田重信氏がネット72で優勝した。

今回は師走にもかかわらず温かい天候に恵まれた楽しい競技会だったが、中国自動車道路の神戸三田インター付近でのトラック横転

事故のため、京都、大阪方面からの参加者が遅れるなど影響があり、スタート順を急遽変更するというハプニングがあった。しかし流石JR勤務の黒田氏はJR利用で悠々到着のうえ練習場でのウォーミングアップも万全で優勝を飾った。

更に、今回は大嶋杯の取切り戦も兼ねており、河崎達夫氏(昭34年卒)、大西一彦氏(昭46年卒)、上田成之助氏(昭47年卒)の3氏がこれに望んだ。終始5ストローク以内に全員がひしめく大接戦となったが、上田成之助氏が抜け出し大嶋杯を勝ち取った。

同窓会だより

庚辰会の報告

山村 龍男 (昭15卒)

庚辰の年(昭和15年)の卒業ということで本野享先生に命名戴いた庚辰会は、今年2月に97才で大往生された松田長三郎先生が教室主任で就職などのお世話を戴いた者共で主に構成されている。卒業50周年を昨年迎えた訳であったが、初めて関東で開いてみようという

ことで、箱根の強羅アサヒホテル(会員制ホテル)に平成3年11月28日(木)午後5時に集合、6時から懇親会を行なった。

前日になって3名の級友が欠席のやむを得ない事情が生じたが、それでも10名の面々が、折からの静岡方面の大雨という気象警報にも

また、今回から新たに60才以上の参加者のハンディキャップを年齢に応じて適増するルールを採用した。生憎今回は新ルールを生かした上位入賞者はなかったが、ローハンディを重荷に感じて参加を今まで遠慮されていた方も今後奮ってご参加ください。

次回第57回は、平成4年5月24日(日)に開催される予定ですので、多数のご参加をお願いします。なお、詳細は関西電力(株)(電話06-441-8821)企画部津田雅彦(昭58年卒)まで。



拘らず定刻には予定者全員出席という状況だった。(関西5名、関東5名)

関東からは定刻よりも3時間も早くチェックインを狙って出かけたおかげで湯本からの箱根登山鉄道の沿線はまだ紅葉の見事な風景も見られたが、強羅は紅葉の時期を過ぎていたので、温泉ホテルは貸し切りの様な状態だった。

集合の効率化のために、予め千四百字程度の過去、現在および未来に亘る自己紹介の原稿を欠席者にも紙上参加ということで提出願った。原稿および返信は18頁程の記念文集として小冊子にまとめられ、当日手渡された。従って宴会

の席で各人が述べることは現在の最大関心事に絞られた。如何に生き甲斐を求めるかが目下最大の課題になつていように見受けられた。宴の最後はミニ寮歌祭で締めくくった。

翌日は昨日とは打って変わって快晴の天気であつたので、大部分はいわゆる箱根のゴールデンコースをロープウェイや観光船で大湧谷や芦ノ湖を巡りながら、晩秋の箱根の眺めを満喫し近い再会を約して別れた。

なおこの企画進行中、9月に香川君、11月に大橋君を失った。ご冥福を祈りたい。

(写真前列左から松本、武田、小南、吉田、角井、後列左から黒田、山村、相木、日野、北爪)

紅葉や色とりどりの半世紀
高唱す健児に還る秋の宴



昭和18年9月

卒業生 同窓会

平成3年11月10日(日)11日(月)の2日間、恒例のクラス会を行った。同窓生21名、夫人令嬢同伴を含め総勢31名が10日午後5時西大津のびわこホテルに集合した。

の歌手(台湾からのエトランゼの美女も含めて)の歌声に魅せられ、思わずも肩組み合せて青春の琵琶湖巡航の歌となつてラウンジに響いた。

いづれも古稀を迎えた、あるいは古稀を過ぎた第一線を退く身の上の者、数名の現役ぱりぱりも含むが大半で、お互いに大学時代を忍び、再会と健康を喜びあつた。琵琶湖汽船の豪華クルーザーの船上パーティは、美酒美食と異国

京都大学電氣科に学んだことに全く悔いのない、いやむしろ、この40有余年を全力投球で走り抜けてきた男達の誇らしい一夕になつた。湖面にうつる万灯の輝き、都心では、もはや観られなくなった星づく夜、各人の胸に数々の万感

洛友21会四国旅行

幹事 大川 達雄

クラス会の発足当時には適当なクラス会の名称を決めようとしたが、なかなか決まらないうまま21年

卒業のため洛友21会とした経緯がある。5年前まではクラス会の開催地

を秘めてふけていった。

翌11日観光バスで湖北観音を渡岸寺、石道寺等と訪ね、賤ヶ岳の古戦場に登って、深まりゆく秋色の余吾湖および奥琵琶の湖面のさざ波をめめた。

来年の再会を固く約しつつJR米原駅で解散したのは午後5時近い夕景であつた。遠く関東、北陸から参加された諸兄に感謝し、また同窓生、角田京阪電鉄会長の蔭のご協力を深く感謝しお礼申し上げます。

(世話人一同 平成3年11月記)

暮れなずむ
琵琶のさざなみ華やかに
洛友会の 宴弾みて
(田辺輝雄)

を京都およびその周辺を主として行ってきたが、今後は家族ぐるみの懇親会として行うこととなった。北は北海道から南は九州までクラスメイトがいるため、各地各所旧跡をたどることとなった。選定条件として世間に埋もれていて、しかも価値のある所、または有名であるが交通不便で行き難い所を選定して観光を兼ねた懇親会を開催することに決めた。その他地元の方が最も詳しいので、選定地点の

クラスメイトが企画・立案そして実施することになった。

第1回東北(十和田・八幡平等) 第2回九州(長崎・雲仙等)

第3回関東東北(日光・会津等) と毎年開催し、本年は、

第4回四国 となった。

平成3年11月17日、各人々方まで適宜高知市内見物の後、高知市第一ホテルに集合した。夫婦11組

単身10名の総勢32名となった。

翌18日午前8時待機しているチャーターバスに乗り込み、快晴の高知市を後にして、先ず内海と外海の両側を見渡せる横浪三里の有料道路を走り、静かな内海の漁村の点景、また太平洋の荒波の打ち寄



せる断崖、点在なる島々と大自然のつくる景色に感嘆しつつ小京都と称せられる中村を通り、日本一の清流といわれる四万十川を渡り、かの有名な足摺岬に到着した。昼食後、椿のトンネル・太平洋に突き出た断崖の上の足摺灯台を見て、四国八十八ヶ所霊場の第38番の金剛福寺にお参りした後、再びバスで奇勝竜串を訪ね、グラスボートで海中のサンゴと色とりどりの美しい魚の群泳、しばし時を忘れた一駒もあった。夕刻宿泊地の宿毛に到着し、クラス会を開催、楽しい語らいのうちに夜は更けた。

翌19日午前8時20分、再びバスに搭乗し御荘町で、御荘湾上を行くロープウェイで周辺の景色を觀賞しながら山上に到着、宇和海展望塔に登りその後記念館に入った。ここには終戦直後に、宇和の海に墜落した旧日本軍の戦闘機「紫電改」が整備されて展示されていた。折から太平洋戦争勃発50年、我々卒業して45年、過ぎし方が思い出されて感慨無量のものがあり、なかには涙する人の姿もあった。

その後宇和島に向い、和霊神社に参拜の後、古い家並みの残っている内子町で、八日町々の1kmにわたる古い民家を眺め、和ロソクの昔の製造所を見学して、午後4時松山市で解散した。

2日間快晴に恵まれたが、惜し

むらくは暖かすぎて遠方が霞んでいたのが残念だった。

バスは運転手も実直な人で、ガイド嬢も終始、歌・エピソードを

25周年同期会の会場にはふさわしいともいえる。

卒業当時、大変お世話になった学生主任の先生方、近藤文治先生(電子)、坂井利之先生(電気、木嶋昭先生(電2)にご招待申しあげたいところ、嬉しいことにそろってご出席賜ることになった。一方同期生は、125名に案内状を出したが、出席の返事は31名。幹事としては、50名ほどは期待していたのであるが、師走の多忙な時期、にわか開催ではいたしかたなかった。なお、この内、関西以外からの出席者は8名であった。

さて、同日は定刻の30分程前からひとりふたりと集まり始めた。同じ学科の同期生は大体顔も名前も覚えていたが、他学科の人はそうはいかない。ましてや中には25年ぶりの再会という人もいる。名刺交換してむかしばなしなどしているうちに、学生時代の面影が少しずつ思い出されてくるというたぐあいであった。いずれにしてもお互い皆いい年になったなあというのが実感であった。

パーティーの冒頭、先生方にご挨拶いただいたが、われわれが卒業した昭和41年は、東京オリンピックの後の大不況の影響で、当初は大手電気メーカーまで軒並み採用ゼロを宣言する程で、就職斡旋には相当ご苦労をされたということであった。現在も続く戦後の高度成長時代の電気系学生の超売り手市場のなかで、どうもこの年だけは特異年であったようである。そんなわけで、学年主任でご苦労された先生方にとっては、この年の卒業生は特に印象深いものがあるようである。

宴会に入ると、皆それぞれ、その道の分野で活躍しているものばかりで、ここに至ってもやはり話題の中心は仕事仕事。ビジネスチャンスとばかり名刺交換や情報交換する人、大学に残っている同期生に卒業生をよこせと談判する人と、企業戦士の面目躍如であった。しかしそのうち話題は自然と学生時代の思い出、出席できなかった同期生の消息に向かい、旧交を温めること2時間、最後は先生方を囲んでの記念撮影と5年

25周年同期会の報告

日本電池 芦田 義孝 (昭41卒)

年も押し迫った昨年12月7日、昭和41年卒業の電気系3学科同期会を楽友会館で開催した。この同期会は卒業10年目から5年おきに開催しており、今回は4度目、25周年になる。前回の20周年の同期会では、次回は東京で開催するという事になっていたのであるが、11月に入っても東京在住の同期生からは一向に声があがらず、年を越えてしまいうるな心配にたまたまず、京大の奥村君が会場を押さえるとともに、関西在住の電2の同期生に声をかけて、急遽開催の運びとなったものである。

師走の土曜日とあって、会場はどこもいっぱい、楽友会館だけが空いていたのである。ここはわれわれの卒業時の予餞会の会場であり、懐かしい思い出の場所である。豪華なホテルの宴会場より

織り込んだ説明で大変よく、楽しかった。今回は中国地方が信州の予定です。

刺交換してむかしばなしなどしているうちに、学生時代の面影が少しずつ思い出されてくるというたぐあいであった。いずれにしてもお互い皆いい年になったなあというのが実感であった。

パーティーの冒頭、先生方にご挨拶いただいたが、われわれが卒業した昭和41年は、東京オリンピックの後の大不況の影響で、当初は大手電気メーカーまで軒並み採用ゼロを宣言する程で、就職斡旋には相当ご苦労をされたということであった。現在も続く戦後の高度成長時代の電気系学生の超売り手市場のなかで、どうもこの年だけは特異年であったようである。そんなわけで、学年主任でご苦労された先生方にとっては、この年の卒業生は特に印象深いものがあるようである。

宴会に入ると、皆それぞれ、その道の分野で活躍しているものばかりで、ここに至ってもやはり話題の中心は仕事仕事。ビジネスチャンスとばかり名刺交換や情報交換する人、大学に残っている同期生に卒業生をよこせと談判する人と、企業戦士の面目躍如であった。しかしそのうち話題は自然と学生時代の思い出、出席できなかった同期生の消息に向かい、旧交を温めること2時間、最後は先生方を囲んでの記念撮影と5年

先生方を囲んでの記念撮影と5年

先生方を囲んでの記念撮影と5年

先生方を囲んでの記念撮影と5年

先生方を囲んでの記念撮影と5年

後の再会を約してのお開きとなった。閉会后、話し足りない連中が最終電車を気にしながら、久し振

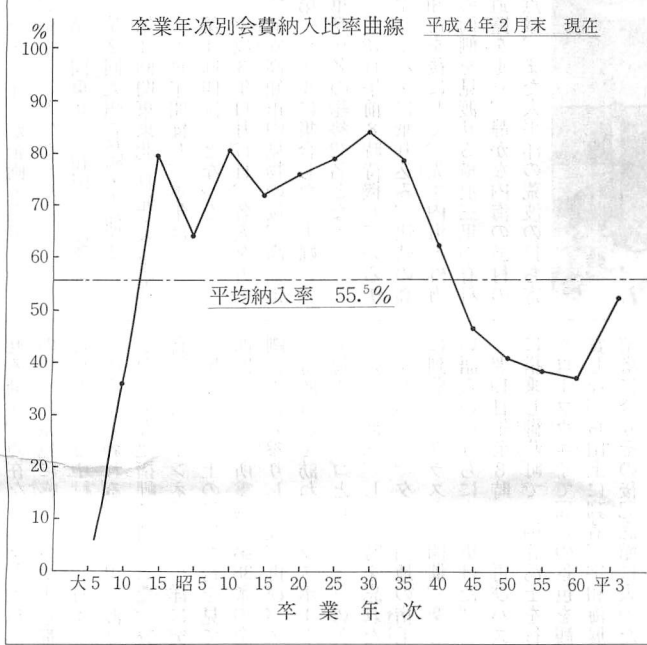
りの京の盛り場で、また大学近くの居酒屋で盃を重ねたの言うまでもない。

卒業年次別会費納入

状況について

会員の皆さんのご協力で平成3年度の会計業務も完了しました。会費納入対象者総数(A)五、五七

〇名(平成3年卒まで)で、納入者総数(B)三、〇九一名で平均納入率(B)/(A)は五五・五%。平成元年度に比較して約八%悪くなっている。会費値上げも影響しているのかとも考えられますが洛友会活動支援のため今年も皆様の洛友会を何卒よろしくお願い申し上げます。(本部事務局)



お詫びと訂正

- 一、洛友会会員名簿
 - 1. 頁12関西支部役員評議員 48 ↓ 50 杉本卓に訂正方
 - 2. 頁102昭和25年卒業の山崎徹郎勤務先の空欄へ記入方 関西電力(株)総合技術研究所嘱託 Ⅱ 06-491-〇二二一
 - 3. 頁214昭和55年卒業の猪川洋 自宅住所訂正方 〒259-11伊勢原市石田861-1 N T T伊勢原社宅8-302 Ⅱ 〇四六三-94-1九三七〇
 - 4. 頁442横河ヒューレットパック 1下中山中卓(昭26)取締役社長は間違いで横河電機株式会社取締役社長に訂正方
 - 5. 頁21高周波熱錬株式会社関係会社(株)ネットレン竜ヶ崎(株) ネットレン加古川に訂正方
 - 二、洛友会会報(第158号)一月号
 - 1. 迎春広告頁(3)日新電機株式会社の社長小松 ↓ 田中康夫と訂正方
 - 2. 頁(6)電気系教室懇話会秋の講演会の記事、始めに来春卒業予定の……体験談と後輩への助言に、修士2回生(西谷和博、山崎俊之君)より、を挿入方
- 以上謹んで訂正致します。

編集後記

陽春の頃となりましたね。今年のは暖冬だったので桜の開花は早いと予報されていましたが3月後半からの冷えこみと長雨で例年と同じ頃に桜満開、好季節と申し上げたいところですが雨で花見気分になれません。皆さんはいかがですか。3月23日京都大学の卒業式がありました。今年は景気も薄雲に覆われパツとしませんが工学部電気系では修士83名、学部150余名が卒業されました。それぞれの職場に新旋風を起こす活躍できつと暗雲を吹き飛ばしてくることを期待すると共に洛友会入会を心からお祝い申し上げます。

6月27日(土)洛友会本部総会が開催されます(詳細は前記通り)会員の皆様、ぜひ出席方お願い申し上げます。またこの5、6月には各支部総会・懇親会が開催されます。それぞれご案内がありますが、ぜひ出席賜り支部活動のご支援とお互の交流を計りましょう。

本4月号の巻頭言は東京支部長横河ヒューレットパックカード(株)取締役社長の笹岡健三氏(昭26年卒)にお願い致しました。笹岡様は横河HPいや日本企業の総合的品質管理のご指導に力を注いでおられます。ご多忙のところ有難うございました。次回7月号は近藤副

会長にお願いしております。

この会報は会員皆様の情報紙です。各卒業年次で開催されるクラス会・同窓会や各支部でおこなわれる行事・ゴルフコンペ等、報告ください。また個人投稿もお待ちしております。

平成4年度も洛友会事務局はミスのないよう頑張りますので何分のご指導とご支援の程お願い申し上げます。終りになりましたが会費の振込みも忘れぬようご協力方お願いします。(事務局長矢木原邦雄記)

訃報

- 講大10 越坂延夫 4.2.13
 - 大12 荒井武治 4.2.5
 - 昭元 小宮義和 4.2.24
 - 昭2 千本安次郎 4.2.3
 - 昭6 角田高八 3.10.5
 - 昭8 酒井長武 4.1.18
 - 昭9 川嶋一夫 2.11.21
 - 昭9 重見通雄 3.12.24
 - 昭10 日高安社 3.5.15
 - 昭13 熱田本成 3.5.20
 - 講昭14 山本誠助 3.10
 - 講昭15 田山正吾 3.10
 - 昭17 伴 康 昭62
 - 昭21 大橋徹次 昭63
 - 昭25 萱島敬一 4.1.16
 - 昭60 藤目和弘 3.7.30
- 以上の方々のご逝去を悼みました。謹んで哀悼の意を表します。